

憧れの世界遺産《ポタラ宮殿》

近藤 節夫

初めてチベットの「ポタラ宮殿」のデッサン画を眼にしたとき、大きな衝撃を受けた。周辺の牧歌的な景色やみすばらしい佇まいに引き比べ、場違いに豪壮で、巨大な宮殿がラサ中心街の丘のうえに、あたかも周囲を睥睨するようにでんと君臨し、圧倒的なオーラを放っているように感じられたからである。現実には存在する建物とはとても思えなかった。はたしてそこにはどんな人たちが住んでいるのだろう。そのころ少年だった私の空想と好奇心は果てしなく広がっていった。

当時世間離れした深山のかなたにあるチベット(現中国チベット自治区)のカリスマ性は、少年の夢と空想にさらに拍車をかけた。まさに神秘のヴェールに包まれた「おとぎの国」の出現だった。爾来ポタラ宮殿は、永遠の憧れとなった。

それが、ダライ・ラマ14世の国外脱出以来、チベットの存在は一転して世間から注目を浴び、現実社会の前に引き出されるようになった。観光ブーム、世界遺産人気により、この神秘的なポタラ宮殿も少しずつ観光客の目に晒されるようになった。そして06年7月、大胆にも標高5,000mを超える鉄道が敷設されたことによって、標高3,650mのポタラ宮殿もまた容易に手の届くところまで天孫降臨してきたのである。

07年11月そのポタラ宮殿へ挑戦する機会が訪れた。まさにチベット仏教(ラマ教)の聖地である。車窓から遥拝する遠景が、コバルト色の空の下に心の琴線を揺さぶる。車を降りると一目散にポタラ宮殿正面に馳せ参じ、精進潔斎の気持ちで「五体投地」をやったのけた。これでポタラ宮殿訪問の所期の目的はほぼ果たせた。指示に従って宮殿内部に入る。外部で330段ばかりの階段をゆっくり昇りながら、宮殿内へ入り天辺まで辿り着いた。

憧れのポタラ宮殿を昇りきったぞ！ 心の中で叫びながら下界を見下ろした時、足元遥かに陽を浴びて「五体投地」を試みている幾人かのラマ僧の姿が見えた。